

依御物忌無菊宴、又無平座事、長元九年九月九日、中宮威子有事穢中、仍無平座、承曆元年九月九日、依上卿不參無平座、此外重陽宴停止年、平座不及沙汰例等存候、歟、

〔長祿二年以來申次記〕九月九日公家、大名、外様、御供衆、申次、番頭、節衆、今日より出仕衆、小袖にて候、一御對面次第同○如御盃以下同前也、

〔殿中申次記〕從永正十三丙子至同十七庚辰歲記錄事

九月九日出仕如常 一粟一籠、柿一籠例年進上之御太刀被下之八瀬童子、一滑薄一折例年進上之無量壽院、

一粟一籠例年參三寶院殿、

〔年中定例記〕殿中從正月十二月迄御對面御祝已下之事

九月九日、御對面以下同前○如夜に入て菊にわたを御きせ候、

〔殿居囊武家年中行事〕九月九日、五ツ時花色小袖、長重陽御祝儀、方石以下花色に不限、

〔柳營新編年中行事九月〕九月九日 一御規式大廣間 出御御上段御著座如例年御召物空色御小袖御長袴著御 諸事

端午之通り但シ出仕之面々染小袖長袴 山王別當觀理院 同神主樹下兵部 出仕御禮申上

之

〔幕朝年中行事歌合中〕二十六番 左 重陽參賀

祝ひおく世を長月の袖の上にもちらぬ花田の色を見るかな○中略

重陽參賀は、九月九日に行はる、彌生三日さつき五日の節にかはる事なく、唯出仕の面々、花田

色の小袖に長袴をきる、むかしはさもなかりしにや、いつとなく此色にのみなれりけるを、舊

きを捨てとにや、目付衆の中に、ひとり二人つるばみの色を交へ著る也、此日兩御所にも、千く

さ色の御衣を奉る、

〔親元日記〕寛正六年九月九日甲寅、御祝四御方分調進之、此内今出河殿御臺様江はじめてまいる、